
ごら えもーしょん

三束みや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ごら えもーしょん

【Nコード】

N61090

【作者名】

三束みや

【あらすじ】

あらゆる癒しの力と死の呼声を裡に秘めた植物の王マンドラゴラ。地の底にて暮らしていたマンドラゴラの少女、ドルフォネイション・エペ・エステラルダ・マンドラゴラ（略称）は人間観察をするべく地上へと姿を現した。明朗快活にして解語之花。そんな彼女は今日もどこかで人をおそらく救っている……ような気がしないでもないです。

簡単なじこしょーかい

その日、私は初めて硬い天殻を突き破ったのでございます。
もつとも、私個人の力などたかが知れたもの。

硬い土砂を何度も踏み固めた上に不快臭を放つ灰色の液体を塗り
たくった頑強な殻。

そんな物をこの華奢な手で突き破れるはずありません。
汚れますし、荒れてしまいますし。

仕方なく土竜^{もぐら}さんの身体に寄生、もとい御力を借りて掘り進んだ
のは良いのですが、思いの外時間がかかってしまいました。

地中に埋め込まれた情報伝達線より流れ出でた情報によりますと、
土竜さんは非常に早く地面を掘り進めるイメージがあつたのですが、
実の所は一日に数mしか進まぬという体たらく。

結局、数ヶ月余りの時間を費やしてしまったのです。

私が始めて地上で目にしたのは生憎の曇り空、の下にある標識で
した。

何やら青い素地に白い矢印。

「これが地——きやんつ」

鉄猪^{クルマ}の前足が私の美麗且つ衆目を引いてしまふ罪深い顔に迫つて
いるのに気付き、慌てて頭を引つ込めます。

鉄猪は言葉にするのもおぞましいほどに醜悪な放屁^{ガス}を尻から垂れ
流して行きました。

ちよつと信じられません。

初めて天殻の外に出で、感動の坩堝に浸っているこの私を、粉砕^{ころ}
しかけた拳^{ガス}句に、ですよ。

ガ、放屁^{ガス}まで浴びせていくなんて。

許されるわけがありません。

「げほつごほつ。ざけんなー。感動返せー。今度会ったら死なせちやるぞー」

突然、空を飛んでいた雀が数羽、地面にへたりこみました。ピクピクと悶えて何か言いたげに、どこか恨めし気にこちらを見えています。

あ、三匹とも気絶しました。

幸いにも、距離が遠かったので死には至らなかったよう。

私の叫びは死の叫びですが、時々自分でそれをすっかり忘れてしまいそうになるのです。

訂正します。

すっかり忘れます。

申し遅れました。

私の名前はドルフォネイション・エペ・エステルダ・マンドラゴラ、でございます。

いささか相性を付け難いかと思われますが、ご近所のオケラ様やミンミン蝉の幼虫様からは【ゴラちゃん】で通っております。

これでも中々人気を博しているのですよ。

由緒ある私達の種族。

世間一般では万病に良く効くお薬として親しまれております。

付け加えますと私達はその中でも多分に誇り高い血統です。

けして、一方的に搾取される苦渋の歴史を歩んで来たわけではございませんよ。

気紛れに足の裏を舐めさせて風邪を治して差し上げるくらいの慈善活動はいたしますが。

春秋（但し夏と冬は不要）の睡魔さんこんにちおやすみなさい的な日溜まりの気だるさと、TVの討論番組に登場する昨今与野党議員のような乳首の突き合いの如き馴れ合いを好む私達でございます

れば。

如何なる手段を用いても、この生温い生活を守ってきたのです。

ところでこの世に夏と冬は必要ないと思つのですが、きっと同意して下さる方も多いと信じております。

植物の私からすればあれは神様の苛め。

特に夏に至つては、人間さんという野蛮な生き物に毎日のように視姦されている同胞たちが飲まず飲まずの扱いを受け、無残にもうら若きその身を枯らしていると聞きます。

私は根菜類ですので乾燥にも比較的強い方ですが、仲間の苦境を聞かされれば当然胸が痛みます。

でも、私より若くて綺麗な奴は死んでしまえばいい。

ちなみに、私の年はピチピチの三百十二歳です。

自我が芽生えてからは十二年ですが。

話がいささか航路を外れかけているご様子。
おもかし

面舵一杯です。

確か意味は右に曲がれ、です。

でも、曲がろうとして何かにぶつかりました。

未だ地面の穴から出ていないので、当然といえば当然なのですが。

何という醜態でありましょうか。

ああ、穴があつたら入り……既に入っていました。

ええと、こういった場合はどうすればよろしいのでしょうか。

大気汚染にごよーじん

今回天殻の外へ出てまいりましたのは、最近土に流れ込む水の量
があまりに多いので人間さんの調査に行つてこいと【かいざーママ】
が私に命じた次第でございます。

ママなのにかいざーとはこれ如何に、ですが。

西洋かぶれにも程があります。

ちなみに、パパママの語源は未だ謎なのだそうです。

かいざーとのたまうだけあり、ママは始祖から三代目という稀に
見る長寿でございます。

その大きさは人間さんと比べても遜色ありません。

ママは根っからの旅好きであちらこちらに赴いておりました。

蓬萊山ほうらいざんとかいう場所では、たまたま死に掛けていた人間さんを助
けたそうです。

ハンガリーやアイルランド等にも足を伸ばしたことがあるとか。

ところが、その噂を聞き付けた時の権力者が国を総動員してママ
を探し回ったこともあるそうで。

事実、そんな逸話も残されていますからその足跡は偉大と言わざ
るを得ません。

それによる金銭的損失がいくらだったのか、何万人の血が流れた
のかはわかりかねますが。

ママの話はともかく。

私も初めて天殻の上に立つわけでして、少なからず高揚感はある
のでした。

しかし、高鳴る鼓動もそれ以上の騒音に飲み込まれていきます。
端的に言つと外野が五月蠅いのです。

頭上を飽きもせず行き来する不遜なる者共に軽侮の目を向けます。
人間さんの中にはそれを喜ぶしやからうもない輩もいるとのことですが。

負の感情を正の感情に昇華するのですから、あながち悪いことでもないのかも知れません。

「おうおう、鉄猪共がぶーぶーとはしたない。……にゅー？」

おもむろに、鉄猪が沈黙しました。

綺麗に行きと帰り、二列に並んでいます。

上には赤色光がちらちらと。

「かくへんかー？」

兎にも角にも今が抜け出すチャンスのようにです。

今のうちに安全な場所に避難した方が良さそうです。

私は天殻の隙間からひよこつと頭だけを出し、左を見て右を見て左を見ます。

安全確認オーライ、天殻に両手を掛け、懸垂の要領で乗っかります。

こうして、私は初めて天殻の上に立ったのでした。

かのガガーリンは言いました。

『地球は青いヴェールを纏った花嫁のようだった。しかしどこを見回しても神はいなかった』と。

ただ、それは宇宙から帰ってきた時の、落ち着いた精神状態の時の台詞です。

初見の興奮を表すなら、私としましては某即席乾麺のCMに使われた台詞の方を断固推挙いたします。

『これが……地球……』

真に美しいものを眼にすれば感嘆、沈黙、即ち三点リーダー以外では表せないと思うのです。

ふと、鉄猪クルマが身震いしたのを見て、慌てて路傍に寄りました。

予想通り、先ほどまで私が立っていた場所を鉄猪クルマが往来し始めました。

手始めに、私は近くを歩いていた瘦せぎすの猫さんに取り付——
ー、交渉しました。

猫さんは快諾して私にお身体をお貸し下さいました。

体長は三十センチほど、色は茶色と白のぶちです。

体内の構成成分からするに、あまり栄養状態がよろしくないご様子。

何やら身体がムズムズするのは体毛の隙間に何かが潜んでいるのでしょう。

ですが触覚がいささか鈍い私は、もっと別の事に気を取られていました。

「むー、噂には聞いてたが、これは空気がれるが著しく不本意だー」
猫さんの眼から送られてくる映像を見てげんなりしました。

私達マンドラゴラは微粒子の集合体を色として視覚化することが出来ます。

青色は至って清浄、離島や上高地辺りの空気ならこのレベルです。
ただ、綺麗過ぎて落ち着かないと訴える方もいらっしやいます。

清川には魚さんも住まないと言いますし、理解できなくもありません。

きつと空気にも多少の濁りは必要だということでしょう。

緑色は僅かに濁っています。

片田舎や富士山麓辺りの空気ならこのレベルです。

別段、青と違いはありません。

ごく一部の^{アエロ・クリティック}大気批評家でもない限り気付かないのです。

人間さんもタイ産の米と国産の米なら直ぐに違いがわかるかも知れません。

しかし新潟産の米と茨城産の米の違いが口に入れた瞬間わかるでしょうか。

あ、別にどちらが上だとか言うつもりは根毛ほどもありませんのであしからず。

実際、青色の地域は日本の国土の百分の一もありません。

それに比べて緑色の地域はその二十倍から三十倍はあると言われている。

諦めや妥協は肝心です。

百点に限りなく近い、しかし十万円以上する料理。

九十点台前半の、しかし一万円以下の料理。

どちらが大衆受けするかは一目瞭然です。

完璧な物を知ったら後には楽しみがありませんしね。

黄色までなら、何とか妥協できると思います。

都市郊外や高尾山辺りであれば大体このレベルかと思っています。

但し、工業地帯の近くに住んでいる方は全くもって油断できません。^{ん。}

場合によっては^{だいたい}橙色を通り越して赤色に染まりかけることも。

風向きが変わると得体の知れぬ異臭に包まれることがある。

そんな心当たりがある方はえまーじえんしーです。

橙色、赤色は限界を超えています。

主に東京二十三区の約三割、パチ屋の九割以上がこれに当たります。

あれは、生き物が住めるレベルではないらしいです。

煙草が云々と喚き散らしている人間さんがあの環境下で平然と呼吸している。

私は人間さんの思考に際するばらどつくすを未だ理解しかねています。

ここは、紛れもなく橙色に——
うつぶ。

唐突に胸がむかむかし、吐き気が込み上げてきました。

えまーじえんしー、えまーじえんしー。

私は一刻も早くこの場から離れるべく、猫さんを疾走させます。

びみょーにすれ違ってます

人混みの中をジグザグ走行していたら益々気持ち悪くなってきました。

目に入った灰色の建物の階段をとつとこ上がっていきます。と思つたら自動ドアで反応してくれません。

仕方ないので勢いをつけて何度となくジャンプしてみます。

あ、開きました。

屋内に脱兎の如く掛け込み、気持ち悪さを全て猫さんに押し付けて緊急離脱します。

「……ふいー、せーふ」

幸い、建物内の空気は橙色に近い黄色でした。

本当なら緑色が望ましかったのですが贅沢は言っていられません。先ほど感じたのは切実に酸素マスクを欲するレベル。

それくらいに空気が淀んでおりました。

その証拠に、傍らでは猫さんがげろげろやっています。

アウトー。

いやはや、猫さんもとんだ災難でしたね。

何でいきなり気持ち悪くなったのか、何でここにいるかも理解してないご様子。

でも、猫さんは普段から毛玉を口にして吐き戻します。

こういう作業は手慣れている人がやるものなのです。

「こらー！ どこから入ってきやがったー！」

後ろから飛んで来た突然の声に危うく叫び声を上げかけました。上げていたら至近距離にいた猫さんの命も危うかったでしょう。

辛うじて両手で口を塞ぐのが間に合いました。

【大の字】が【人の字】になりましたが、不審には思われなかったでしょうか。

恐る恐る振り返ると、そこには紺色の服を着た人間さん（♂）がおりました。

私の不確かな記憶によりますと、警察官と呼ばれる職種がその格好をしていたはず。

微妙にディテールが異なるので、もしやコスプレという趣向でございましょうか。

紛らわしいので勘弁して頂きたいものです。

実は、マンドラゴラはにぶちんの人間さんに対しては真の姿が視覚化されません。

仮の姿は【大の字】形をした太いゴボウのような姿に過ぎないのです。

子供に対してはこの限りでもないとのことですけど。

ただ、昨今は私達を見ることが出来ない子供もどんどん増えてきているそうです。

第六感が失われつつあるのかも知れません。

または、夢を忘れて現に生きようとしているのかも知れません。

その辺りの曖昧な点もきっちり観察してはつきりさせたいと思います。

そういえば、夢と現の狭間を漂う人々を妄想家と呼ぶとか。

語意はわかりませんが、何だか格好いいじゃありませんか。出来たらそういう方にも会ってお話を伺いたいですね。

案の定、人間さん（♂）は私に見向きもせず、猫さんを無造作に掴み上げました。

ちよつとだけムつとしますが、拗ねたわけではありませんよ。

私だって容姿には控えめながら自信があるんです。

何度となく『ゴラちゃんはどこにでもお嫁さんにいけるね』と言われたものです。

白磁のような艶やかな肌は水分を大量に湛えています。

赤子のもち肌を上回るほどにぷるっぷるです。

一皮向けば、ですが。

私達は気を許した相手にのみしか精霊の姿を現わしてはいけないのです。

ああ、真の姿を明かせぬのが口惜しい。

私はそう思いつつ、足から飛び出た髯根をがじがじと噛み締めます。

——にゃー。

猫さんのか細い声が鼓膜に炸裂します。

何この生き物、かわいい。

円らな瞳に申し訳程度の髭。

手には桃色の肉球。

トライアングル

三角形を象る耳が動く、動く。

正に、媚びるために生まれてきたような生き物です。

人間さん（♂）がしげしげと持ち上げた猫を見つめています。

「あん、お前何だかやたら痩せてるなあ。長い事飯食ってねえのか」あれ、猫さんって人語を解する事出来ましたっけ。

猫さんに喋りかけた人間さん（♂）を見て、私は記憶を手繰りながらも首を傾げます。

勿論、私ほどの精霊になれば、人語も話せますし動物に対しても感情を読み取るくらいは出来ますが。

——にゃー。

「ったく、わかったわかった。しょうがねえ、飯くらいは食わしてやるよ」

人間さん（♂）はそう言うと、そのまま猫を連れて廊下の奥に行ってしまった。

でも、猫さんの鳴き声からは一度目、二度目共に【困惑】が感じられました。

きつと「ここどこー？」、「あなただーれ？」等と尋ねたのだと思います。

知ったかぶりは人間さんの特技なのでしょう。

とはいえども、怒鳴った一分後に飯をあげようという気まぐれな人間さん（♂）にちよっぴり興味が出てきたのは確かでした。

私もこっそり後を追ってみることにします。

怒鳴る人間さんーじょー

——はぐうはぐう

十分後、猫さんは人間さん（♂）の買ってきた猫缶に食らいついでいました。

残念ながら某猫缶ではありませんが、ちゃんとまっしぐらしています。

最近は猫缶も色々種類があるようです。

今猫さんが食べているのは【マグロ味】。

でも、ほにやら味と書いてあるのは何となく原材料に不安が残ります。

ファンタが無果汁であるように。

「はっ、もしやー」

ふと私は、重大な事実に気付いてしまいました。

私が猫さんをこの建物へと導かなければ、猫さんはそう遠くないうちに栄養失調で息絶えていたかも知れません。

いえ、確実にそうなっていたことでしょう。

何という事でしょうか。

天殻に出て間もない内に、私は図らずも失われようとしている尊い命を救ってしまったのです。

これが、マンドラゴラという種に生を受けた天命なのでしょうか。私、自分の背負った運命の重みをひしひしと感じずにはいられません。

ようやく我に返りました。

人間さん（♂）は猫の食いつきっぷりを見て目を細めています。

「美味そうに食うなあ。ほら、良かったらこっちも飲めよ」

この方はどうやら、猫さんを飼った経験があるようです。

ちゃんとミルクから仄かな湯気が立ち昇っていますので、人肌程度に温めてから与えています。

牛乳には乳糖という物質が含まれています。

しかし、猫さんの腸にはそれを分解してくれるビフィズス菌さんがあまりおりません。

そのため、大量に摂取すると下痢を起こしてしまいます。

この方はその事をちゃんと知っているのか、どうやら牛乳をお湯で割って与えている模様です。

本当なら猫ミルクが望ましいのですが、そのままあげるよりはずっとポイント高いですね。

食事が終わると猫さんは幸せそうに喉を鳴らしました。

人間さん（♂）に身体を丹念に擦り付けてから、ごろりとその場で横になります。

先ほど私が感じたあの痒みの元凶が伝染っていないからいいのですが。

少し心配になりました。

「……はあ、お前は良いよなあ。飯食っただけでそんなに幸せそうな顔できて」

人間さん（♂）はそんなことを呟きました。

どうやら人間さん（♂）はそれほど幸せではないようです。

人間さん（♂）はふと、掲示板に目をやり、溜息を吐きました。そこには何やら表らしきものが貼ってあります。

よく見ると、空欄の殆どにボールペンで。印が付けられています。

一番下の時間という欄には、十八時〜翌八時と書かれています。

……これ、労働基準法的に大丈夫なのでしょうか。

何となく、溜息の理由がわかったような気がいたします。

突然部屋の入り口のドアが開きました。

「おい、木塚あ！ 休憩まだ終わらねえのか！」

顎髭を生やした壮年の人間さん（♂）が、猫に餌を上げていた人間さん（♂）に言いました。

何で質問するだけなのにいちいち怒鳴るのが謎です。

「あ、はい。直ぐ行きます」

木塚さんはすくつと立ち上がりました。

「つたく、仕事も碌に出来ないくせに休憩だけはしっかり取りやがってえ！」

「……すみません」

「謝っている暇あるんらとつと来い！ 全く使えねえなあ！」
ちよつと、謝らせたのは誰ですか。

「……すみません」

ちよつ、貴方も何で謝っているんですか。

私が口を開きかけた時には、木塚さんは部屋のドアに歩み寄っていました。

「手前、走ってこいよお！ もたもたすんな、駆け足い！」

「……す、すみません！」

二人はドアを閉める音と共に、慌ただしく走り去りました。

その場に猫さんと、（主に私に）消化し難いストレスを残したの
は言うまでもありません。

この恨み、どうやって晴らしてくれましょう。

ね、寝過ごしたー！

さて、わたくしの能力のことについてお話しする時がやってきたようです。

その能力とは主に、患者さんを苦しめる症状を緩和させる薬を作れることです。

エキス、種、花の香りなど形は様々なのです。

例を挙げてみますと――

明日には凄い気だるくなる、しかし一晩中眠気を吹き飛ばしてハイテンションを保っていられるエキス。

お正月の麻雀やセンター受験当日にどうでしょうか。

飲めば必ず下痢になる、しかし体中の痛みという痛みを丸一日消し飛ばしてしまうエキス。

用途は幅広く、生理痛にももってこいですし副作用でダイエットも出来るという優れ物！ 下痢の時にも腹痛は起きないので女性に大人気の一品です。

昨今人気がありそうなのが十分間喉が渴きつばなしになる、しかし体内のアルコールを十分間だけ別の物質に変えてしまうエキス。

二日酔いの緩和にも使えますし、車で来ているのに急な飲み会が入ってしまった時、上司が【送っていけ光線】を放っている時にも使えます。

警察の検問突破用として常備しておく心安心です。

私達は、皆さんの未来のために、そんな素敵なお薬を作っています。

とか言つと、どこかの製薬会社のキャッチフレーズみたいですね。何故デメリットから先に話すかと言つと、その方が心理学的に好印象を与えるからですよ。

「木塚さんにしょほーするのはどれがいーかな」

組み合わせが豊富なだけに意外と悩みます。

が、まずは手始めに人間さん（髭）を私の目の前で（ここ重要）一発殴つて貰い、私のもやもやとした感情を吹き飛ばして欲しいところですよ。

ただ、木塚さんが返り討ちに遭つたらちよつと私の心が痛むかも知れませんが痛まないかも知れません。

力が溢れ出て、痛みを感じなくなつて、そのくせ破壊衝動が抑えられなくなる。

そんな兵隊さんも大満足な素敵処方をしてしましよう。

これで完勝間違いなしです。

「ぬんぬんぬぬん」

両手を前に差し出して手にエキスを集めます。

一見すると、浮気が発覚した時の草食系の夫が取るようなポーズにも見えるかも知れませんが。

お通じではありませんが、結構力んです。

そもそも、高貴なる私の一族は不快臭を伴う排泄物とは無縁なのです。

「はーん」

あ、出ました。

指先からポタポタと滴る黄土色のエキスです。

勿論、気の利いたパッケージなど付いてはおりません。

「出来たー、これをー」

私の粘性のある唾液で隈なく包み、カプセル状にします。

……一応補足しておきますが、ただの樹液ですからね。

先ほどまで木塚さんが飲んでいたペットボトルがテーブルの上に
見えます。

コーヒーですから、多分ジョーシアですね（偏見）。

傍らでは猫さんが毛繕いをしています。

後ろから忍び足で交渉して身体をお借りします。

あっさりとテーブルの上に飛び乗り、離脱します。

猫さんはいきなり視界が変わったことに意表を突かれたのでしょ
うか。

手足をバタつかせて下に落ちてしまいました。

でも、猫さんはちゃんと足から着地できる能力があるので大丈夫
です。

私は頑張ってペットボトルの蓋を開けました。

エキスを投入しようとしたら、何故か手がプルプルと震えて
しまいます。

ああ、何なのでしょう、善行を行っているはずなのにこの何とも
言えない背徳感。

背中がゾクゾクつとして癖になってしまいそうです。

「——はっ、正気に戻らねばー」

何とかスペシャルエキスの添加を終えました。

私は猫さんの背中目掛けて飛び降ります。

ポヨンと一回跳ねて、地面に着地します。

猫さんはびっくりして毛を逆立て、散々部屋を跳ね回った後どこかに行ってしまった。

さようなら猫さん、また逢う日まで。

命を救って差し上げた恩なら、いつか返して下されば結構ですよ。

さて、後は見届けるだけです。

ドーピン木塚VS強面人間さん（こわもて）（髭）。

果たしてどちらが強いのでしょうか。

体格的には木塚さんが不利ですが、先に拳を当てれば勝機は十分あります。

中々の好カードです、少しだけワクワクしてきました。

と、急激に眠気が襲ってきます。

何分地上に來たのが初めてですから興奮しすぎたのでしょうか。

木塚さんが戻って来るのはおそらく明朝の八時。

待っているのも退屈なので、少し眠る事にします。

部屋の隅に置いてあった観葉植物の植木鉢を間借りします。

それでは、おや——ぐう。

目が覚めると、既に窓から日差しが。

と、何やら台風でも通ったかのように部屋中が滅茶苦茶に。

「……こ、このありさまはー」

椅子は碎け散り、窓硝子は嵌っておらず、壁紙は三十年経過した後のような状態に。

ドアの上部の蝶番が外れかけてキィキィと音を立てています。
そして、部屋中には夥しい血痕。

——バタコンッ

おもむろにドアが外れ、床に倒れました。
地面が震え、その揺れが私にも伝わります。

「あわわわわ……」

ああ、何やら嫌な汗が止まりません。

け……計算通り！

目が覚めてから十分もすると、青い制服を着た方々が部屋に押し寄せてきました。

「またもやコスプレかと思いましたが、どうやら違うようです。被っている帽子の中心にきらきら光るのは正しく旭日章^{まひるあさひのしるし}。」

朝日の清らかな光を表しているということです。

昨今の不祥事の連発を鑑みれば失笑ものですが。

「はあ、随分と暴れたみたいだな。後始末が大変だぞこりゃ」
おそらくは三十代後半のダンディな警察官さんが頬を掻いています。

その横にはがっしりとした体格の若い警察官さんが手帳になにやらメモっています。

二人とも相当に日焼けしているのを見ると、外回りの大変さが窺えます。

「犯人は既に拘置所へ送っています。今も相当錯乱しているみたいですが、麻薬^{マク}でもキメてたんですかね」

「最近多いよなあ。良い年した大人がこんなところでやらかすたあ世も末だね」

「余程ストレスが溜まっていたんでしょうね。これじゃあ職場もクビですか」

うぐぐ、何だかお腹の辺りがシクシク痛む気がしてきました。
もしかして、これが？コイ？と呼ばれるものなのでしょうか。

「お前、現場にいたんだろ？　どんな感じだった」

「いや凄かったですよ。自分の胸の辺りをドンドン叩いて滅茶苦茶吼えまくってました。ありや人間じゃなくってゴリラですよ、ゴリラ。何ていったって柔道の有段者三人がかりで抑えられなかったんですから。大の大人が片手で払いのけられちまうんですよ」

「は、それが本当ならそいつオリンピックに出せばメダル取れるんじゃないか」

「はは、かも知れませんね」

話を聞く限りでは、私のエキスは人間さんに使うと効力が出過ぎてしまうようです。

それにしても悔やまれます。

何故私はその時起きていなかったのでしょうか。

起きてさえいれば、木塚さんを止めることが出来たかも知れませんが。

死の叫びも加減を間違えなければ気絶させるだけで済みます。

「で、被害者は一名でいいんだよね？」

「はい、その場に居合わせた同僚の方が両腕を骨折しています。既に病院に運ばれましたが」

あら、木塚さんちゃんと強面人間さん（髭）に復讐を果たしたんですね。

それを聞いて少し安心致しました。

良かったですね、木塚さん。

意識ははっきりしていなかったでしょうが、ちゃんと貴方の手で目的を果たせたのですよ。

自然と顔が綻んでしまいます。

良いことをすると気持ちもすっきりしますね。

「そうか、被害者の名前は？」

「木塚公平二十四歳。加害者の犬山万次四十七歳と同じくこの警備会社セロムに所属していました……」

「……………え？」

思わず、声が出ました。

「ん、千倉。今何か聞こえなかったか？」

「いいえ。何も聞こえませんでしたか？」

「そうか、……空耳かな？」

「徹夜で疲れているんですよ。で、被害者の話によると、警備からこの部屋に戻ってきて直ぐに様子がおかしくなったそうなんです。咄嗟の事で逃げる暇もなかったということですね。腕を掴まれてそのままポキッとやられたということです」

「ゴリラに腕を掴まれりやそうなるわなあ。ところで、鑑識はもう呼んだな？」

「後五分ほどで到着します。それと一つ気になったんですが」

「ん、何だ？」

「ここに貼つてあるローテーション、明らかに労働法に抵触してますね。一応しかるべき機関に問い合わせた方がいいかと」

「そうか、連日の超過勤務に堪え切れなくて薬に手を出した可能性もあるかも知れんな」

「きつと叩けば色々と出てきますよ」

そんなやり取りを耳にしつつ、私は自分の計画の甘さに打ちひしがれていました。

きつと、あのペットボトルを傲慢な強面人間さん（髯）こと犬山さんが飲んだでしょう。

でも、よく考えてみると結果としては最善のような気がします。

木塚さんはかなり疲れていたようですし、休養する良い機会かも知れません。

社員に怪我をさせられたということで入院費は労災が会社か犬山さんが負担してくれるでしょう。

そして、犬山さんは覚せい剤取締法違反＋器物損壊＋傷害＋公務執行妨害のコンボで解雇される可能性100%です。

木塚さんが職場復帰しても、もう犬山さんに怒鳴られることもありません。

確かに、暴力による復讐という目的は果たせなかったかも知れませんが、

しかし良く考えてみれば。

暴力に訴える等ということは本来人としてあつてはならないことです。

マハトマ・ガンジーも非暴力の大切さをとうとうと説いていますし。

今にして思えば私は、自分の計画の甘さに頭のどこかで気付いていたのでしよう。

何しろ、木塚さんには猫さんに餌を差し上げた前科があります。

犬山さんにペットボトルを差し上げる可能性も少なからずあったのです。

もしかしたら、犬山さんがペットボトルを奪ったのかも知れませんが。

そうですね、そうです。

どちらに転んでも、得られる結果は満足のいくものだったのです。

私は他者を幸福にするための恐るべき才能に身を震わせつつ、忍び足で部屋を後にします。

唯一の計算違いは、後日にセロムの評判がガタ落ちして潰れてしまったことくらいですね。

健太君は賢さが上がった！

ある日、健太君というお子さんが担任の先生から職員室に呼び出されました。

一ヶ月前に野球をしていて校内の窓ガラスを割ったことが今頃バレたのでしょうか。

それとも、クラス内の好きな女の子のスカート捲りをして泣かせた件でしょうか。

やんちゃな年頃だった健太君は両手の指では足りないほど心当たりがありました。

ところが、健太君を待っていたのは身に覚えのない濡れ衣でした。

担任の藤原先生は健太君を自分の椅子に座らせました。

そして、健太君の両肩に手を乗せて優しく諭すように声を掛けました。

「健太君？ 貴方、クラス内の交換日記誰かに代わりに書いて貰ったでしょう。駄目じゃないの、ズルしちゃ！」

「ええ？ 僕そんなことしてないよ！ ちゃんと自分で書いたもん！」

健太君は何が何だかわからない、といった様子で首を振ります。

「そんな言い訳は聞きません。嘘言っても先生にはちゃんとかわっちゃうの。途中から絶対に大人が書いているもの」

「そんな！ 先生、僕嘘付いてないよ！ 本当だよ！」

「強情ねえ……、じゃあこれ全部読んでみなさい。一字一句間違えずによ」

そう言って先生は机の上の本棚に立ててあった学級日誌を健太君に手渡しました。

その日誌にはこう書いてありました。

——今日は、学校の花だんにあつたへんな木が女の子になつてはなしかけてきました。小さいけれど目がクリクリとしてかわいい女の子です。いちばん上のお兄ちゃんもっている【ふゆぎあ】とかいうやつとおなじくらいの大きさでした。なんだかはなすことばがおかしいけれどかわいかったのできにしないことにしました。女の子はぼくにみつつのタネをくれました。その子がいうにはこれのむと五分だけあたまがよくなるということです。しんじられなかったけれど今さっきのんでみました。しかしぜんぜんききめはありません。やつぱり、それは出まかせだったのだろうか。

まあ、確かに省みれば信じ難い話ではある。そもそも植物が自らの意思を以って歩き出すなどという童話紛いの出来事は古今東西、どのような記録を掘り下げた所で出て来ることはあるまい。やはり疲れているのかも知れない。クラスでの立ち位置を模索する友人たちとの息詰まるやり取り。そんな子供社会を知りもしない、教師が容赦なく出す宿題の数々。そして家族の潤滑油となり、夫婦仲を拗こじれさせぬ様にさり気なく配慮する毎日。

ああ、何と無駄な労力を強いられているのだらう。鬱だ、ポケモンでも集めていた方がまだ建設的というものではないか。そんな生活をしていれば下らぬ戯言に流されてみたくなる日もあるというものだ。生憎と期待に添う結果は得られなかったが。まあいい、金輪際そんな与太話をしんじることはないとおもいます。きょうはこれでおしまいです。あしたはだいすきなたいいくの日だからとってもたのしみです。

「し、しんじ……？むずかしい？だ！」

健太君は胸を張りましたが、先生は頭を抱えて首を振ります。

「違います。それは？しんじがたい」と読むの。ほら御覧なさい、

自分で書いたという割には読むことすら出来ないじゃないの。大体、途中まで句読点も使っていないでしょ。ちゃんと正直に言えば先生も怒らないから」

「嘘じゃないよ！ ほ、本当に自分だけで書いたんだってば」

健太君は涙目になって抗弁します。

それを見て藤原先生は溜息を付きました。

「あのね、健太君？ 先生をあまり怒らせると親御さんに連絡しなくちゃいけないわ。そうなたら先生も凄く悲しいなあ」

「え……パパ達に？」

「健太君には自分の過ちを認められる大人になって欲しいの。わかってくれるわよね？」

健太君は一生懸命に考えています。

間違いなく自分の書いたものであることは事実です。

しかし、先生はちつとも信じてくれません。

もしパパとママにも信じてもらえなかったらどうしよう。

そう考えた健太君は、凄く怖くなりました。

「……はい。……その、ごめんなさい」

健太君は【妥協】を覚えました。

「宜しい。これからはこんなことをしては駄目よ。あと、物語ならまだしも日記にこういうことを書いてはいけないわ。そもそも日記と言っのは——」

健太君は俯いたまま拳を握っています。

大人が子供の言葉を信じてくれることなんかない。

ならば、疑われたら自分が悪くなくてもとりあえず謝ろう。

そうすれば溜飲が下がるのだから、とでも思っているのでしょう。

彼の涙の滲む目には決意の光が宿っていました。

室外機の上に乗って窓の外からそれを見守っていた私は大変満足いたしました。

「健太ー、強くいきろー」

私の慈善行為によって健太君は見事、大人への階段を一足飛びに駆け上がったのです。

彼はきっと将来、立派に接客販売業をこなすことでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6109o/>

ごら えもーしょん

2010年11月9日21時40分発行